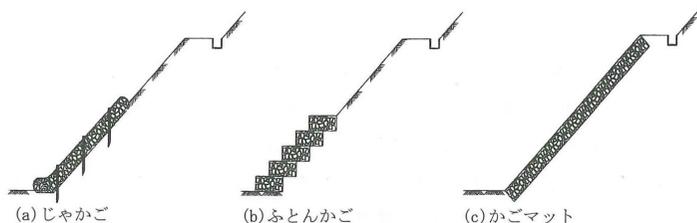


かご工の一般形状例を解図8-12に示す。



解図8-12 かご工の一般形状例

かご工における環境・景観への対応は、主要材料が自然石であり大規模な施工も少ないため、修景緑化を行わなくても違和感を生じることは少ない。

緑化する場合は、局部的に客土を行い樹木やツル植物等を植栽する方法が考えられるが、排水の促進を目的としているため、植栽に際しては客土や植栽が排水の障害とならないよう注意が必要である。

(1) モルタル・コンクリート吹付工

モルタル・コンクリート吹付工は、岩盤の風化防止、雨水等の地山への浸透による浸食や崩壊の発生防止・緩和、小規模な落石防止等の機能がある。

モルタル・コンクリート吹付工は、風化しやすい岩盤、風化してはく離または崩落する恐れのある岩盤、切土した直後は堅固でも、表面からの浸透水により不安定になりやすい土質等に用いられる。

吹付厚さは、のり面の地質状況や凍結深等の立地条件を考慮して決定するが、一般にモルタル吹付工の場合は8~10 cm、コンクリート吹付工の場合は10~20 cmを標準とする。ただし、繊維補強材の混合により補強された吹付工の吹付厚はこの限りではないが、使用に当たっては適用条件や施工条件等の十分な検討が必要である。なお、寒冷地域等気象条件の厳しい地域におけるモルタル吹付工の吹付厚さは10 cm以上必要である。

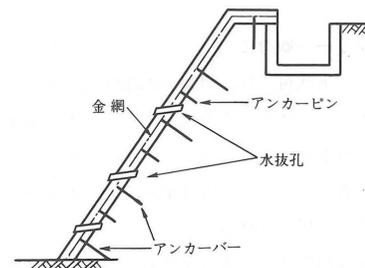
吹付配合は、過去の実績や経済性等を考慮して決定するが、一般にセメントの

使用量は360~420kg/m<sup>3</sup>の範囲、水セメント比は45~60%の範囲が多い。モルタルやコンクリートの圧縮強度については、一般に15N/mm<sup>2</sup>以上を目安にする。

なお、吹付用の細骨材に関しては、細粒分が多すぎると所要強度を得るための使用セメントが多くなるので、細粒分を多く含まない良質な細骨材（粗粒率2.5~3.1程度）を用いて耐久性を確保することが重要である。

施工後の湧水の処理は難しいので、湧水が懸念される場合は極力開放型の工法を用い、モルタル吹付工等の密閉型の工法は避けることが望ましいが、やむを得ない場合は、吸出し防止材や暗きょ排水管等を使用した湧水処理、または水平排水孔や地下排水溝等の適切な排水工を設計する必要がある。

吹付けに先立ち、のり面の浮石、ほこり、泥等を人力または水・空気圧により清掃した後、一般に菱形金網をのり面に張り付けて凹凸に沿いアンカーピンで固定するが、凹凸の少ない場合には溶接金網を用いることもある（解図8-13参照）。アンカーピンの数は1 m<sup>2</sup>に1~2本を標準とする。勾配が急で吹付厚が厚い場合、のり面の凹凸が著しい場合は、必要に応じてアンカーピンやアンカーバーの本数を増やすことが望ましい。



解図8-13 モルタル・コンクリート吹付工の例

吹付け面には原則として水抜き孔を設置する。水抜き孔は、標準として直径40~50 mm程度で2~4 m<sup>2</sup>に1個以上の割合で設置する。のり肩の処理は地山まで完全に巻き込むように吹付ける。また、施工面積が広く平滑な場合には、10~20 mに1箇所の割合を目安として伸縮目地を設けることが望ましい。また、吹付厚が